

「一法庵とはどういう場所なのか？」を読んだ感想

感想その一

拝読して、(今更ながら)感動してしまいました。一法庵を初めて知る方々にも十分にワンダルマのその必然性が伝わると思います。

日本は仏教国と言われているものの、内情はそうではありません。

様々な要因、またそれによる誤解や偏見を払拭するに足りる、論理的で明瞭なご説明文だと思いました。

これを読んで何も感じなかったら、相手に大問題があるということ。
そうでないことを願うばかりです。

感想その二

読ませていただきました。

非常に簡潔、かつ理路整然と書かれています。ですから、「ワンダルマ」とは何を意味するのかが良く掴めます。また、ここに至るまでの先生の軌跡も書かれているので、納得がいきます。一法庵関係者でなくとも、理解し易いと思います。

感想その三

第四図の世界へ、第五図のことが適切に紹介されていると思います。正法は永遠に続いてほしいと思いますが、実際かなり難しいものだと思います。

そこで、テラワータとチベット仏教、大乘仏教が一つになって源流に立ち戻り、ワンダルマとなったことは大変、大変、大変ありがたいことです。

リメ運動の起こりは今からみるとけっこう昔のことですが、世界と仏法の情勢を見据えた、正に人間離れした慧眼だったと思います。

こういう人間離れした智慧がはたらいて、ワンダルマとして合流したことを踏まえて状況を見ると、そもそもテラワダと大乘は、何か大きな力がはたらいて、敢えて二つに分けて保存されていたかのようにすら思えます。

そしてワンダルマはこれから、テラワダや大乘へ還流し、正法の存続を支えていくことになるのだと思います。一法庵はその還流の起点となるのだと思います。ありがとうございます。そしておめでとうございます。

感想を書いたつもりが、宗教法人化と裏磐梯一法庵建立の祝辞のようになりました笑

感想その四

「一法庵とはどういう場所なのか？」を拝読しました。

先生の人生をかけた修行の末に明らかになったこと、そして一法庵の方向性がはっきり示されています。

お父様が存命中は、一法庵では、海軍時代の先輩達を含む先の戦争の犠牲者の鎮魂のための法要をなさっていたのですね。私もある方から鎌倉は合戦のあった場所だから、観る人が見たら、もうそこにいるのには耐えられない場所と聞いていました。

きっと一法庵が極楽寺橋の先の彼岸に建てられていて、多くのさまよえる霊を鎮魂する役割を果たしていた、と合点しました。

「ワンダルマ仏教」とは、チベット仏教の伝統の中のリメ(超宗派)運動の拡大版だとは初めて知りました。そもそもそのような素晴らしい動きがチベットのケンチェリンポチェ(の先代たち)が代表となってあったことは初めて知りました。

さて、私が驚嘆したのは以下の文章です。

「元々清浄なところ、完璧なところに落ち着き、只管に打坐をする、それでもう充分なのだという教えです。道元禅師は「修証一等」と言われ、澤木興道老師は「なんにもならない坐禅」、つまり何かをこれからする必要のないのが坐禅だと言われます。」

ここまではっきりと明言されていて、従来の平面的な道元禅師の修証一等の理解とは全く違っていて、リアルに生きてくる仏法だと感じました。ぜひ引用させてください！

凄かったのはもう一点あります。

「空なる場所を、その外から静かに観察しているもう一つの意識があったのです。いわば「謎のX」とでも呼ぶしかないもの。その「謎のX」こそ、「我々は最初から清浄であり、完璧だ」という大乘仏教の大前提そのものでした」です。

従来の仏教は「空」が最高地点です。それ以上は言及して深めることはしません。しかし、「空で、清浄で、完璧だ、涅槃だ」というなら、それを認識するのは「何だ？」と論理的にもなりますよね。この点を永井さんは哲学の論理的思考から突っ込み、そこを言及しないで「諸行無常」という仏教は陳腐だ、間違いだ、と指摘します。

そこを、先生は「謎のX」として長いこと課題にされていてついに、メソッドも完成し、それを実際に体感できるワンダルマメソッドを打ち立てられました。

これは世界で唯一です。最先端です。

今後ますます一法庵が「一華開五葉」の根源、「一」を広めることをうれしく思います。

まさに「ただ一つの真理があるだけ。」その追求こそが、一法庵の根本的な方向性だと、はっきり認識しました。

有難うございました。今後もよろしくお願いいたします。

感想その五

「一法庵とはどういう場所なのか」を拝読いたしました。

一法庵設立当初の活動の様子から始まり、山下先生の提唱されているワンダルマ仏教への飛躍、更には現代日本の宗教を巡る諸問題や世界の仏教の成り立ちなど、難解な専門用語を使わずに解説されています。

それが全世界に向けて公開されるようになったことで、誰もが本物の仏教に触れる機会ができたと思っています。

ワンダルマ仏教の活動は、これからの日本を生きる上で必須なものになるだろうと感じました。

一法庵は先生のお父様の代では、戦争の犠牲者の鎮魂の場所として機能していたのですね。昔に合戦のあった鎌倉にこのような場所が作られたことで、一法庵は大きな役割を果たしていたことが知りました。

また、山下先生の代になってからはワンダルマ仏教が展開され、チベット仏教で始まったりメ運動と大きく通じるものを感じました。先生とケンツェリンポチェとの対話から本格的に始まった一法庵の方向性の正しさは、最近では次々と明らかになってきています。

先生が大乘仏教の只管打坐を極めた後に、テラワダのパオメソッドを経由し、テラワダの最終地点で発見された「謎のX」が同時に大乘仏教の始まりでもあることを示唆されました。

先生が両者の統合の道筋を示されたことで、世界各地に点在していた仏教が再び一つになる兆しを感じられました。これは仏教史上で重要な転換になると思います。

また、シンキングマインドにがんじがらめになり、その牢獄の状態が当たり前の世界も存在しています。牢獄の外に出ることで、初めて自分が牢獄にいたことを認識できるのですね。

ワンダルマメソッドの実践とその理論だけが、唯一この状況を打破することが可能であり、その根拠が一法庵のホームページで公開されるようになったことで、ワンダルマ仏教はより世界に広まっていくだろうと思いました。

感想その六

「一法庵とはどういう場所なのか？」拝読させていただきました。

一法庵の全体的な位置づけがよくわかり、実によくまとめられたと感銘を受けました。

「一法庵の歩み」では、御尊父の戦争への強い想いが綴られていますね。最初は別荘としての一法庵であることとの関係が良く分かりませんでした。先戦争犠牲者への鎮魂の意味合いが根っこにあることが良く分かりました。

「一法庵の宗旨＝ワンダルマ仏教」では、お釈迦様からの仏教の歴史的な3つの流れ（テーラワーダ仏教、大乘仏教、チベット仏教）と、それぞれの流れや宗派がそれぞれ別の世界観を持つがための「限界」について触れられ、この限界を超えるためにはお釈迦様の教えに立ち返る必要があることが良く理解できます。

そして何より一法庵がまさしくその位置づけの中にあるとともに、歴史的な背景からも一法庵が生まれる必然性を正に感じることができる内容となっていますね。

一法庵サンガの活動が、先生のご指導の下で歴史的にも深い意味があるということ、大いに自信を持つ事ができます。

ありがとうございました。